



専属ナース物語

〈長崎県〉しょうさき 庄崎 み 美恵 37歳

「お前は最低の看護師だ！」

これは、2013年の寒い冬の夜、ある患者さんから言われた言葉です。「ある患者さん」というのは、私の父です。

父は肝硬変を患い、私が勤務する病院に入院し、治療を受けました。その闘病生活はとても厳しいものでした。私は介護休暇を申請し、そばに付き添う生活を送りました。看護の仕事に就いて15年。初めての経験でした。

私は、看護師であるプライドと家族からの期待を裏切らないように、毎日自分の力の限り、必死で付き添いました。しかし、父は夜間にせん妄状態になることがあり、そのたびに「なんで私を困らせるの？」とつぶやきながら、布団に潜り込んで号泣しました。

「お前は最低の看護師だ！」という言葉も、せん妄状態の父が発した言葉でした。私は、父から言われたというシヨックと、看護師としてのプライドが一気に崩され、父の部屋を飛び出し、待合所で号泣しました。そして、いつの間にか

寝てしまいました。

その夜に不思議な夢を見ました。幼い私と若い父。私が楽しそうにワープロを教えてもらっている風景。次は、苦手だった数学を教えてもらっている風景。次から次に場面が展開し、まるで物語のような夢を見ました。気付くと窓から日が差ししていました。その朝は、とても不思議な気持ちになり、逃げ出したはずの父の病室に自然と駆け寄りました。

父の寝顔を見て「もしかして、今度も私に何かを教えたいのかもしれない」という思いが私の心の中に舞い降り、その瞬間に柔らかい涙が頬を流れました。

その日から、夢の続きの「専属ナース物語」が始まりました。

介護休暇が終わり、仕事に復帰した私は、日中は看護業務を、夜間は私服に着替えて父の付き添いをしました。父は、白衣を着た私には厳しく、あいさつや立ち姿、環境整備などを細かく評価し「お前は心遣いが足りないことが多すぎる」「お前の看護はアイデアと発明が

足りない」といった感じで、毎日叱ってられました。でも、白衣を脱いで「娘」に戻ると「お前の仕事は大変だ。体を大事にしろよ」と温かい声を掛けてくれました。

いつの間にか、家族の病気という大きな出来事も、私に与えられた素晴らしい時間なんだと思えるようになりました。

「お前もいい看護師になつてきたな」と言ってくれた1カ月後、父は家族に囲まれて旅立ちました。

時が経ち、父の友人から「お父さんは『俺の専属ナースは最高の看護師だ』って、美恵ちゃんのことをいつも自慢していたよ」という話を聞きました。そのとき、涙があふれ、目の前の父の写真がゆがんで見える中、「お前に合格点をやる。専属ナースはたくさんの人を助けなさい」という声が聞こえた気がしました。

私は、今もその場所で働いています。時に叱り、時に褒めてくれた父の言葉を胸に、私のナース物語は、これから続きます。